

# 高温により出穂は早まる見込み！穂肥は幼穂を確認し遅れずに！

## 1 出穂期と穂肥時期のめやす

- 7月11日現在、出穂期は平年より2～3日程度早い見込みです。今後も高温が予想されるため、さらに早まる可能性もあります。
- 穂肥の施用に当たっては必ずほ場で幼穂長を確認し、遅れずに施用しましょう。

品 種	出穂日 めやす	1回目穂肥		2回目穂肥		2回合計窒素量 (kg/10a)
		時 期	出穂前日数	時 期	出穂前日数	
こがねもち	7/27頃	7/9～7/12頃	18～15	7/17頃	10	1～3
コシヒカリ (平坦地) (中山間地)	8/2頃	7/15～7/18頃	18～15	7/23頃	10	1～3
	8/8頃	7/21～7/24頃		7/29頃		
にじのきらめき	8/4頃	7/5～7/10頃	30～25	7/21頃	14	2～5
みずほの輝き	8/9頃	7/15頃	25	7/26頃	14	3
新之助	8/5頃	7/15～7/18頃	21～18	7/24～7/26頃	12～10	0.5～3

※ 稚苗5月10～15日頃、中苗5月15～20日頃に移植した場合を想定

## 2 コシヒカリの穂肥診断

- 今後、高温が予想されています。2回目穂肥は後期栄養維持のため、確実に施用してください。
- 全量基肥肥料に含まれる緩効性肥料は、土壌水分が不足すると窒素成分が溶出しにくくなるので、土壌水分を確保してください。

### (1) 1回目穂肥(出穂24日前頃)の診断めやす

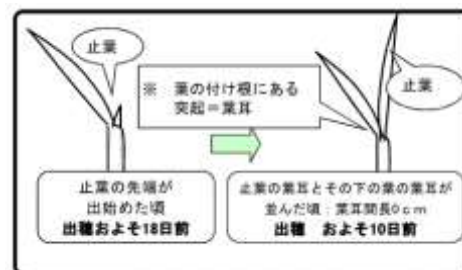
草丈	葉色(単葉)	SPAD値 34～32 葉色板 4.2～3.9	SPAD値 35以上 葉色板 4.4以上
	70～75cm以内		時期・量とも基準どおり施用 →出穂18日前：1.0kg/10a
75～80cm以内		施用量を減らす →出穂18日前：0.5～0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂15日前：0.5～0.8kg/10a
80cm以上		施用できない	施用できない

幼穂長 (cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2～0.4	20日
0.5～1.0	18日
4～6	12日
8～11	10日

【幼穂長と出穂前日数のめやす】

### (2) 2回目穂肥(出穂12日前頃)の診断めやす

出穂14～12日前の 葉色(単葉)	出穂10日前の 穂肥量(10a当たり)
SPAD値 32～34 葉色板 4.2～4.5	基準どおり施用 1.0～1.5kg
SPAD値 35以上 葉色板 4.6以上	施用量を減らす 0.7～1.0kg 未満



【止葉の出方による出穂前日数の予測】



【幼穂長の測り方】

### (3) 出穂期10日前以降の穂肥(3回目穂肥)の対応

2回目穂肥の施用後も高温が予想され、出穂期までの葉色低下が懸念されるほ場では、以下を参考に追加穂肥を検討してください。

施肥体系(基肥+穂肥)	判断時期	葉色のめやす	施用時期	施用窒素量(kg/10a)	施用する肥料
慣行栽培 (化学肥料体系)	出穂期3日前の葉色 (注)	SPAD値で31以下、 葉色板で4.0以下	出穂期3日前	1kg/10aを上限	化学肥料
特別栽培 (減化学肥料体系)	出穂期6日前の葉色 (注)	SPAD値で33以下、 葉色板で4.5以下	出穂期3日前	1kg/10a程度	有機50%肥料

(注) 単葉を測定したときの数値

## 3 今後の管理対策

### (1) 水管理

- 減数分裂期(出穂12日前頃)から出穂・開花期にかけては水を最も必要とする時期のため、飽水管理を徹底してほ場が乾かないようにしてください。
- 異常高温・強風フェーン時には速やかに湛水し、稲体からの急激な蒸散による障害の発生防止に努めてください。ただし長期間の湛水は避け、可能な限りほ場の水温上昇を抑えるこまめな水管理を行ってください。



出穂期後25日までこの管理を繰り返します

### (2) 極早生品種の収穫準備

- 出穂の早まりに加え、今後も高温が予想されていることから、平坦地の極早生品種では収穫開始が例年よりも早まるものと予想されます。
- ほ場ごとの出穂期の早まりと今後の気温の経過に留意するとともに、今後、JAや農業普及指導センターがホームページ等で公表する出穂後積算気温表を参考に、早めの収穫計画を立ててください。

品種名	出穂期	出穂後の積算温度	収穫期のめやす
五百万石	7月19日頃	975℃	8月24日頃～
新潟次郎、つきあかり	7月19日頃	1,000℃	8月26日頃～

※ 稚苗5月10～15日頃に移植した場合を想定